

タマネギの休眠はいつ破れるか

中生品種「ターザン」は淡路産タマネギの主力品種の一つである。この品種について常温貯蔵した場合、休眠がいつ破れるかについて検討したところ、6月3日収穫では、7月20日前後であった。このため本品種の長期保存のためには、7月中旬以降、強制的に休眠する温度で管理する必要がある。

内 容

近年、タマネギ貯蔵施設では、大型コンテナの利用拡大に伴い、収穫したタマネギが直ちに搬入されるようになった。しかし、貯蔵施設によっては、早くに出芽して商品性が低下する事例がみられた。一般に、タマネギは収穫後しばらくの間、自発的に休眠しているため、どのような温度条件下にあっても芯芽は動かない。しかし、自発的な休眠が破れた後は10～20℃の比較的低温の条件下では芯芽が動き出す。一方、吊り小屋などで常温貯蔵した場合、9月頃まで25℃以上の高温のため、休眠が破れた後でも芯芽の伸びは強制的に抑えられる。また、0℃前後の低温では強制的に休眠状態を保つことができる。常温貯蔵のタマネギの自発的な休眠の期間が判断できれば、その後の適切な温度管理により品質低下を防ぐことができる。そこで2019年6月3日に収穫した「ターザン」を

用い、自発的な休眠が破れる時期を検討した。

常温貯蔵したタマネギを7月8日～8月16日の間に10日おきに萌芽しやすい15℃の庫内に移動し、常温貯蔵のものとともに内部の芯芽の長さを10日ごとに調査した。

7月18日までは15℃に移動後20日経っても常温貯蔵のタマネギの芯芽の長さとの差がなかったが、7月26日では移動後10日で常温貯蔵の芯芽より長くなった(表)。休眠は徐々に弱まっていくと思われるが、7月20日前後にほぼ破れたものと推察された。したがって、中生品種「ターザン」の品質を長期に保つためには、7月中旬以降は強制的に休眠する温度(0℃)で管理を行う必要がある。

今後の方針

品種による違いや、収穫後すぐに低温に置いた場合の休眠が破れる時期を検討し、タマネギ冷蔵マニュアルに反映させる。

竹川 昌宏(農産園芸部、前淡路農業部)

(問い合わせ先 電話: 0790-47-2423)

表 異なる日に常温から15℃の庫内に移動したタマネギの芯芽の伸び(品種「ターザン」, 2019年6月3日収穫)

15℃に移動した日	15℃に移動してからの、常温貯蔵のタマネギとの芯芽の長さの差(mm)					
	15℃10日後		15℃20日後		15℃30日後	
7月8日	-2.8	ns	-3.8	ns	4.0	*
7月18日	-5.0	ns	0.2	ns	11.2	*
7月26日	1.8	*	11.6	*	19.4	*
8月6日	3.4	*	9.8	*	17.4	*
8月16日	5.2	*	8.6	*	-	

*は15℃に移動したものと常温貯蔵のタマネギの芯芽の長さに有意差あり。(5%, n=5)



写真 常温から15℃の庫内に移動したあとのタマネギ「ターザン」の芯芽の伸び(8月26日撮影)